
箱庭の遊戯

柚木

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

箱庭の遊戯

【Nコード】

N1014BA

【作者名】

柚木

【あらすじ】

「調律の名のもとに命をもらいに来た」

神が定めた基準に従い、世界に満ちる『命の量』を一定に保つ調律者と呼ばれる彼らと、彼らに関わる人々。

様々な価値や想いは交錯し、対立し、人の生は営まれていく。それらは全て神に捧げられる演劇。

<リリアーナ>

バランサー
調律者。

世界に満ちる『命の量』を、神が定めた基準に従い一定に保つ者たち。

世界は絶妙なる命の均衡のもと成り立っている。少なくとも多くてもそれは世界の崩壊に繋がる。

神から授かった力で時には不治の病に苦しむ人間を助け、時に産まれたばかりの赤子の命さえ無慈悲に奪う。

人々は彼らを感謝を込めて呼ぶ。神の御使いと。人々は彼らを憎悪を以て呼ぶ。死神と。

「調律の名のもとに」

彼らは今日も、使命を果たす。

抜けるような青空と、気まぐれに浮かぶ白い雲。

そんな平和を体現したハレの日は、あの女のせいで私の人生最大の不幸な日となった。

「 エリック＝マクレガーはお前？」

その女は何の変哲もない若草色に染め上げた短めのワンピースと、機動性のためか腰ひもを縛り下に細身のパンツを履いていた。亜麻

色の髪を高い位置で一つに結び、ワンピースと同じ若草の瞳がこちらを見据える。歳は私よりいくらか若いだろう。ティーンにしては雰囲気落ち着きすぎていたが、未だ丸みを帯びる輪郭や胡桃の瞳は若い輝きを隠さない。

何処にでも、この村にもいる若い娘と何も変わらなかった。その左手に持つ、身の丈もある木の杖以外は。

その日は私と彼、エリック・マクレガーの結婚式だった。画家を夢見る彼との結婚は周囲が強く反対したが、それを乗りきってやっと結婚にまで漕ぎ着けたのだった。

幸せの絶頂にいた私たちは小さな教会へ続く道を、親や友に祝福されながら歩いていった。そんな最中、いきなり、それこそ影から出てきたように、私たちの正面に女が現れた。いっとう現れたのか誰も気づかなかった。好奇心と疑惑の混じる空気に晒されても少女は動じる素振りすら見せない。

「……ええっと、確かに俺がエリックだけだ」

彼も周りの誰もがその女の纏う異常な雰囲気気付かないのか、若干の戸惑いを見せつつも普通に應對していた。私は、嫌な予感が出た。

この女はダメだ。危険だ。早く逃げなくては

「ねえエリック……」

「エリック・マクレガー」

袖を引く私よりも強く明瞭、そして陰を宿す声が彼を呼ぶ。少女は手の杖を二回垂直に打ちつけた。木が地面を叩く硬い音が響き、辺りから音が消えた。否、そう感じるほど空気がはつきりと変わった。

「調律の名のもとにお前の命をもらいに来た」

クオーーン……

少女がそつと杖を振り下ろす。杖の先端が地面に触れ、そこが一瞬波打ったように見えた。そして聞いたこともない、あえて例えるなら暗い水底に眠る石を叩いたような、美しくも不安を掻き立てる音が……音が、鳴り渡ったと、そう思った時には。

「……………エリック、ク？」

一瞬前まで隣で笑っていたはずの恋人が、到底生きている人間の温度を思わせない肌の白さで倒れていた。

……………何が。一体何が起きたの。ねえ、エリック。

「調律完了」

先程から寸分足りとも変わらない声がそれを告げる。我に返った私は、少女の杖の先端に嵌め込まれた石が輝くのを見た。

それはほとんど反射だった。

「……………返して！ エリック！」

石に取り込まれてどんどん失っていく輝きを、本能で愛する人だと見分ける。私はウエディングドレスが汚れるのも破けるのも構わず、少女に飛びかかった。

しかし身軽な格好をした少女はひらりと半転して私を避けると、もう一度、杖で地面を叩く。それを合図に石は完全に輝きを失った……喪つて、しまった。

「エリック＝マクレガーは調律の名のもと御許へ還ったことを、我、
調律者リゼルがここに宣明する」

調律者……！？

こんな少女が、あの神の遣いと言われる伝説の調律者？

ならエリックは、調律されたって、エリックは要らない命ってこと？

私など気にも留めず、また何も説明もなく、少女は己を基軸に一回転し地面に杖で円を描く。乱れない線が繋がり円を成し、その円から出てきた光が少女を包んだ。

逃げられる。

必死に少女へ駆け寄ろうとしても円より内側に入れない。そこにいるのに。手を伸ばせば届くはずなのに。

仇の少女を憎しみ……いや、怨念を籠めて睨み付ける。しかし少女は動じた風もなく無感動に見つめ返してきた。そこには、一欠片の後ろめたさも何もない。

「アンタが……よくもエリックを！ どうして……！？ どうして彼なのよ。アンタが死ねばいいんだ！！」

「……世界は調律の名のもとに調われる。だから世界に悲劇は満ち、そして抗する喜劇が生みだされる」

なぞかけのような言葉を最後に、少女は消えた。あとに残ったのは果てのない嘆きと、もう二度と私に笑いかけてくれない恋人だけだった。

……エリック。

小綺麗なタキシードと、爪にこびりついた絵の具。

せつかくおめかししたのに、と彼は自分の指を見て残念そうにしていた。私はそこが彼らしくて素敵だと、思った。どうしてあの時伝えなかったのだろう。

「エリック起きて。あのね、私、」

「……リリー」

「ね、エリック。私あなたに伝えたいことがあるの」

「リリアーナ、エリックは調律されたんだ。エリックは選ばれたんだよ、神に。これは喜ばしいことなんだ」

調律された者の魂は神の御元に呼ばれて、永久の楽園を約束される。調律によって世界を救った選ばれし者。喜ばしいこと。

それは誰だって知っていることだ。幼いころから子守唄のように聞き続けたのだから。

喜ばしい？ 世界のため？

私は思わず喉をひきつらせて笑った。

世界って、どの世界のこと？

こんな、彼のいない世界に一体何の価値があるの？ 救うだけの価値があるの？

答えは否だ。

調律者。あの女。……いつか必ず復讐してやる。

だから、ねえ、エリック。いつか絶対に仇は取るから。だから……
……今だけは、泣かせて。

空は相変わらず、清々しいほどよく晴れていた。

「あら、お帰りリゼルちゃん。またお仕事？」

「ただいまマリアさん。少し早いけど夕飯頼めますか」

「ええ、すぐ用意するから。一品おまけしてあげる」

「すみません」

「さて。食べる前にその浮かない気持ちをなんとかしちゃいましょうね。せっかくのマリアさんお手製もそれじゃあ不味くなっちゃうわ」

「特に浮いている浮いていないとかないですよ」

「いいからいいから。まあ話して御覧なさい。私もリゼルちゃんのお話聞きたいし」

「……………たぶん新郎だった。花嫁姿の女に凄まじい形相で襲われた」

「あらまあ。ジルもたいがいだけど、リゼルちゃんもタイミング悪いわよねえ」

「そこで『何で彼なんだ』って言われました」

「あらあらそれは……………また、何とも陳腐で身勝手な台詞ねえ」

「全く」

「はい、おまちとおさま。まあそんな下らないことは忘れて、たくさん食べてゆっくり休みなさいな」

「ありがとうございます、いただきます」

<アール>

「寒い寒い死ぬ死ぬ」

今日は朝から変なお客さんが来た。

「うおお……本気で死ぬかと思った。つか俺がここで死ぬとどうなんだやっぱ種になんのか？ でもその前にリゼルに殺されそうなのが」

「誰？ 何してるの？」

「おー少年！ 少年はこの家の子か？ 家に入れてくれねえかな。温かい飲み物なんかあるとすげえ嬉しいぞ」

柵の向こうで震えていた白い塊はやっぱりお客さんだった。僕は薪で塞がる両手の代わりに足で扉を開ける。

お客さんは文字通り転がり込んできて、ばたばたと駆けて暖炉にへばりつく。あのままだと燃えちやいそうだけど。

しばらくすると全身にこびりついていた雪やら霜やらが溶けて、お客さんの色が戻ってきた。お父さん以外に初めて見た大人の男の人だった。レンガ色の髪の毛に茶色の瞳。肌も浅黒くて、お父さんとは似ても似つかない。旅人さんなのかもしれない。

「お兄さんは、旅人さん？」

「んー、確かにあっちこっち行ってるけど……旅、じゃねえよなあコレ」

「ふうん？」

いまいちはつきりとした答えはもらえなかったけど、まあいいや。僕の町は山奥にあるから外の人なんて滅多にこない。更に谷を越えたところに僕の家はあって、僕は家族以外の人と会ったことがなかった。初めてのお客さんは、まるで封のされたお菓子箱みたいに

わくわくさせてくれる。

「お兄さんは、何しに来たの？」

「調律しに」

今度はすぐにはつきりと答えてくれた。けれどさつきよりもよっぽど分らない。

「……………ピアノなら壊れてないよ？」

部屋の隅に置かれた黒光りを見る。お母さんが大好きだった、そしてよく弾いてくれてたピアノ。

お母さんが死んじゃってから誰も弾かなくなったけど、お父さんは手入れを欠かさないし、僕もこっそり遊んでいるからきれいな音が出るのは知ってる。

そう教えたのに、お兄さんはちょっと肩を揺らして笑った。何か面白いことでも言ったかな？

「ああ、あのピアノは大事にされてんな。でも…………『コツチ』はひでえな」

よっこいしょ。掛け声とともに立ち上がったお兄さんは、コンコンと床を木の杖で叩いた。

そこで初めて僕はお兄さんが杖を持っていることに気付いた。杖の先は赤く暖炉を火を映す。真っ赤な石が埋まっていた。

「さて、仕事仕事。なあんで俺ばかりこんな過酷な労働環境なのかは置いといて」

ちょうどその時、大きな扉が開いた。お父さんが起きてきたんだ。

「お父さん、おはようございます」

「ア—ロ、誰だそいつは」

「えっとね、旅人さんじゃないお客さんで、ピアノじゃないんだけど直しに来たの」

僕の答えじゃ満足できなかったのか、お父さんはますます目を細めてお兄さんを見る。お父さんがいつも、失敗した僕に向ける目とよく似ていた。ああ、怒られちゃう。習慣で目を瞑って歯を噛み締めた。

でもそんな僕に降りかかってきたのはお父さんのお置きぎじやなくて、お兄さんの大きな手のひらだった。ゆっくり撫でられて、おそろおそろ目を開けた。

「どうも、お邪魔してすいませんね。アントン＝ハーティネンさんで？」

「……………いかにも。私に何か用かね。あー、」

「ああすいません、まだ名乗ってませんでしたね。まあ名乗るほどじゃねえんですけどね？」

お兄さんはそこで一旦言葉を切ると、うつすらと笑った。おかしくてしょうがない、そんな風に見えた。

「俺は調律者^{バランサー}ジルベルトだ。アントン＝ハーティネン。調律の名のもとに貴様の命をもらいに来た」

お兄さんはジルベルトさんというらしい。ばかでのるまな僕にはそれしか分からなかったけど、お父さんは違ったみたいだ。顔を真っ青にして、慌てて今入ってきた扉の向こうに戻ろうとした。

「ははっ」

慌てるお父さんを眺めてお兄さんは笑っていた。僕のほうを見て滑稽だよな？ とお父さんを指差すけど、僕は「こっけい」の意味が分からなくて首を傾げた。

そうやってばかな僕をお父さんはいつも叱る。でもお兄さんは怒るところか優しく笑って、それでいい。と頭をくしゃくしゃに撫でてくれた。

もう片方の手はくるりと杖を回し、石のついた側が床をそつと叩く。

「アントン＝ハーティネン。全ての源、御許でその命を洗い流せ」

クオーーン……

お腹の底が揺らされる音が響いた。その震えが収まらないうちに、お父さんが出ていった扉の向こうで階段から重くて大きい何か落ちる音が聞こえた。

よくお父さんが僕を怒っているいろいろ投げたり壊したりする音よりも、もつとずつと怖い音に、薄く開く扉の向こうから目が離せない。そんな僕なんかお構い無し、とお兄さんは口笛でも吹きそんな様子でまた杖で床を鳴らす。つられて見上げると、なんとなく、杖の先の石が光っているように見えた。すぐに消えちゃったから気のせいかな。

「調律完了」

笑みを消して石を見つめるお兄さんは、さっきまでのお兄さんとは別人に見えた。

「アントン＝ハーティネンは調律の名のもと御許に還ったことを、我、調律者ジルベルトがここに宣明する」

小さく呟いた声を最後に、家の中は静かになった。あんなに音を立てて二階に逃げていたはずのお父さんの音も聞こえない。外で吹雪く風が絶え間なく窓を揺らす音だけが聞こえる。

「……お父さん、呼んでくるよ」

どうしたらいいか分からなかったので、とりあえずお父さんをおいでしようとした。お兄さんはお父さんに用があるみたいだし、何よりお客さんを放っておくのはよくないと思ったのだ。

「いや。お父さん呼びに行く必要はねえよ」

「でもお兄さんはお父さんにご用があるんだよね？」

「仕事は終わりだ。俺はもう行かねえと……それに、少年も」

僕？

お兄さんは膝をついて視線を僕に合わせると、肩に手を置いた。

「少年、もうこの家にも少年のお母さんもお父さんも帰っていない。少年はここを出て外に行くんだ」

「でも僕は裏庭以外に外に出ちゃいけないんだよ。鍵だって」

そう、あの大きくて厚い扉は僕が通つちやいけない扉なんだ。もし外に出たらまたお父さんにお仕置きされちゃう。

「鍵なんか、俺が開けてやるよ。そもそも少年はその気になれば鍵くらい開けられる」

でも、と僕は何とか説得しようとしたけど、お兄さんは振り向きもしないで外……裏庭ではなく、正面へと出る扉まで僕を引きずっていった。

そして杖で軽くノブを叩くと、やけに物騒な金属音をたててノブが壊れて外れてしまった。ギギイ……吹雪が扉のすき間から入り込んできて、少しずつそのすき間を広げていく。

「ほら、な」

得意気に笑ったお兄さんは吹雪く外に、躊躇いなく出ていった。

三步も歩けば、もう吹雪でお兄さんの輪郭しか見えない。

お兄さんが振り返る。

「少年。俺は調律者だから、少年に何もしてやれねえんだ」

吹雪の向こうからお兄さんが話しかける。その顔もやはり白く隠れてしまう。

「でも少年は自由だ。望めばどこにだって行けるし、何だってやる。何者にだってなれる」

カン、と風の音に紛れて杖が石畳を叩く音。白の景色に、ぼんやりと光が生まれお兄さんの影を包み込んでいった。

お別れなんだ。その事実がすつと僕の中に入ってくる。 寂し

い。お父さんもお母さんも、もう誰もいないというお兄さんの言葉が蘇ってきて、その言葉が強く冷たく胸に刻まれる。

「お兄さん、また会える？」

「ああ。少年が全力で生きて生きて、そしたらいつか俺が調律しに来てやる。だからそれまで生き抜け」

じゃあな。軽く手を挙げたお兄さんに手を振り返そうとしたけど、その前にお兄さんは吹雪の向こうに溶けて消えちゃった。

僕は家の中を振り返って、また外を見て、もう一度家に身体を回転させる。静かな、寂しい家。お母さんがいなくなっているから、本当はずっとずっと寂しかった。

「……行ってきます」

小さく手を振って、外へ出る。もう振り返ることはしない。

身体に叩きつけられる吹雪が傷口に入り込んで、より一層寒さを伝えてくる。そのくせ昨日お父さんに殴られた頬は燃えるように熱く、熱いのか寒いのかよく分からなくなってきた。

もはや道の体を成していない雪の上を、ひたすら機械的に進んでいった。歩くこと。生き抜くこと。お兄さんの言葉だけを頭の中で繰り返し繰り返し唱えながら。

何度も諦めたくなくて、眠くなって、視界が暗くなる度に小さな光が僕を導いてくれた。こっちだよ。そう言われているみたいで、その先には温かい何かがある気がする、感覚のない足に動くように命じる。

けれど雪につまずいて転んじやったら、とうとうどんなに頑張っても起き上がれなくなった。そうしている間にも雪はどんどん僕の上に積もって行って、何も考えられなくなる。

あの光はどこにあるだろう。最後に顔を前に向けると、揺れる光が見えた。それがさっきまでと違い、近づいてくる気がしたけど、それを確認する前に視界が真っ黒く塗りつぶされる。

ごめんなさいお兄さん。約束、守れなかった。

「おい！　こんなところに子どもが……坊主、しっかりしろ！」

ある北の町で遭難した子どもが一人発見された。身寄りはない、町長が引き取った。

その子どもはよく学び、友に恵まれ、愛する人を見つけ、雪の中でも実る作物の種の開発に成功し名を上げた。初老に差し掛かる前に調律され亡くなったが、彼の表情に悔いはなかった。

幼少時の虐待の影響で障害を抱えながらも真つ直ぐに生き抜いた彼は、死してなお、その名を人々の心に残すことになる。

「うあー、やっと帰れた……」

「……………ジル？」

「マリアさん遅くにすいません。あ、夜食でもいいから何かねえ？」

「ええ、夕飯の残りを温めるから座ってて」

「ホント、助かります……………」

「それにしても遅かったわね、お仕事多かったの？」

「いんや、今回は一人だけ」

「……………ジルは、優しすぎるのよねえ」

「……まだ何も言っていないんですけど俺」

「ふふ、大体分かるわ。本当に調律者のあなたたちは皆、織細よね」

「俺もんなキャラじゃねえけど、リゼルはどうかなあ」

「あら、あの子が一番織細よ。ただ賢すぎるから誰からも、自分からも悟らせないだけ」

「へえ、さすが皆のお母様はよく見てらっしゃいますね」

「あなたたちみたいなきい子を持った覚えはなくてよ？ ……はい」

「ううー、湯気が身に沁みるぜ。いただきまーす」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1014ba/>

箱庭の遊戯

2012年1月2日11時47分発行